魅力ある漁業への啓蒙活動
～漁業者による小学校の水産教室～

久慈地区水産教室実行委員会
小泉　昭三・稲川　勝雄

１．地域の概要

久慈町は、世界に名だたる日立製作所発祥の地で、世帯数の６割がその関連会社に勤める典型的な企業城下町である日立市の南端、久慈川の河口に発達した漁業の町である。現在は重要港湾日立港に隣接して太平洋に面する外港を生産基地として漁業を営んでいる。

２．漁業の概要

当地区には久慈町並びに久慈浜丸小漁業協同組合の２組合が所在しており、前者は正組合員６４名、准組合員２７名、後者は正組合員７０名、准組合員３名で構成されている。

さんま棒受網、小型底びき網、船びき網、さし網、釣、採鮑等の漁業が営まれている。

３．グループの組織と運営

当地区の研究グループとしては、上記組合にそれぞれ漁業研究会が組織されており、これまでヒラメの資源管理や水産物流通改善等様々な課題について取り組んできた。

今回発表する水産教室を私達は漁業に携わる者に共通の、しかも、具体的な成果が表れにくい課題と認識し、将来にわたってこの浜の漁業者が一丸となって取り組む活動とすべく、研究会の枠を越え、久慈地区水産教室実行委員会として取り組むことにした。

４．実践活動課題選定の動機

水産教室のルーツは今から１５年以上前に、当時の久慈浜トロール青年部会（以下、青年部と呼ぶ）が漁業経営の安定と漁業者の社会的地位の向上を図るための一方策として、小学生の水産業に対する理解を促す必要性を感じ、‘漁業者の一日の生活’がわかるようなビデオの作成を思い立ったことに始まる。青年部は「生産から食卓まで」という題でビデオを自主制作してこのアイデアを実現し、平成元年に地元大みか小学校へ教材用として提供した（このビデオは現在も活用されている）。

そして、これが契機となって、平成２年に大みか小学校から青年部へ児童に水産業の話を聞かせて欲しいという依頼があった。青年部員が手作りの資料を作成し、初めて教壇に立ち、第５学年９５名を対象に漁業技術の革新により日本のまき網漁業の発展に多大な貢献をした久慈浜出身の漁業者‘三代芳松’の一生について紹介し、好評を博した。

このような青年部の活動を基礎として、さらに、久慈町並びに久慈浜丸小漁業研究会においても平成７年度のこの大会で‘「Ｎｅｗ　３Ｋ」への脱却ＰＡＲＴⅡ’と題して発表したように、市民にもっと漁業の実態や漁業者の人間性について知っていただき、身近に感じていただくことの必要性を意識し、水産業に関する啓蒙活動の必要性が浜の共通認識になったことで、正に機が熟した形で、近年の水産教室の実践につながっていった。

５．実践活動状況及び成果

平成２年以後、水産教室を行う機会はしばらくなかったが、過去の実績に加え、教科書では知ることができない「漁業に携わっている人の‘生’の話」を児童に聞かせたいという気持ちを強く持った先生が赴任してきたことが幸いし、平成９年に大みか小から久慈町漁協に水産教室開催要望があった。組合からこの話を聞いた私達は喜んでこの要請を受けることにし、早速、教室の内容について検討した結果、できるだけ児童の水産業に関する質問に答えてあげようと考え、学校に質問の集約をお願いした。後日、学校から組合に届いた児童からの質問は多岐に亘っていたが、私達はこれまで培った知識と経験を出し合って回答を考えた。さらに、内容や構成について検討を重ね、手作りの資料を作成した。準備ができた段階で、研究会員や組合職員にどのような内容で行うか知ってもらい、意見を聞くため、リハーサルを行い、本番に臨んだ。さて、本番では漁業士とトロール研究部会員３名が講師を務め、第５学年６２名を前に２時限連続の授業を行った（表１）。私達は授業に集中してもらうための刺激にする目的も込めてモールス信号の打電実演から始め、水産業を様々な角度から取り上げて授業を進めた。進め方で注意した点は学習が教える側からの一方通行にならないよう、寸劇形式を取り入れるなど、参加体験型にしたことである。こうした配慮が功を奏し、最後まで飽きた様子の児童はほとんど見受けられず、身を乗り出して興味深げに漁具などに見入ったり、真剣にメモをとる姿が印象的であった。また、先生からは「実際に漁業に携わる人達だからこそできた授業でした」との感想をいただいた。後日、組合に届いた児童の感想文に、ヒラメの資源管理等今まで知らなかったことがわかったという内容に加え、私達への感謝の気持ちが綴られているのを読み、しみじみと満足感に浸るとともに、今後もこの活動を続けて行こうという思いを強くした。

平成１０年には大みか小の水産教室が周辺に伝わり、同校に加え、金沢、久慈並びに塙山小の３校から新たに教室開催要望があり、すべてに対応した（表２）。各校とも第５学年を対象に前年同様２時限連続で水産教室を実施した。４校合計の参加児童数は３５６名に達し、講師等として参画した研究会員を中心とした漁業者の数も延べ２３名と前年より大幅に増加し、取り組みの輪が広がった。この年は教室のメニューに「カツオ一本釣り模擬体験」や環境保全を意識した「山、川、海の関係」等を新たに加えて内容を充実させた。なお、久慈小の場合は教室開催前に児童が久慈漁港に来て学習する機会が設けられたため、教室では事前学習と重複する内容を省略し、‘三代芳松’の一生の紹介等を取り入れた。

平成１１年には前年の４校に加え、新たに大沼小、坂本小の２校から要望があった。これに対して、私達は「仕事への影響など負担が大き過ぎる」とも考えたが、今回は頑張って引き受けることに決めた。そして、集中的に実施しようと考え、１日２校を３日間連続で実施する方向で各学校と相談し、要望を受け入れていただいた。この年の参加児童数は合計で５２８名に上り、対応した漁業者の数も船びき網漁業の操業を再現するという人手

を要する新メニューを加えたこともあって延べ９０名に達した（表３）。ちなみに、平成２年を含めると、この年までの水産教室参加児童数は１，０００名を越えた。また、この年は水産教室以外に久慈小の校外学習を受け入れたことも付け加えたい（表４）。

これまでの活動によって私達の漁業経営上に具体的な効果が持たらされているとは必ずしも言えないが、以下の３点については大きな成果と受け止めている。

①児童の感想文、開催校の増加等から判断して着実に地域に定着していること。

②水産教室に参画する漁業者の数が年とともに増え、研究会の枠を越えた浜全体の活動に発展したこと。

③私達が初対面の大勢の人の前で話をすることに慣れてきたこと。

６．波及効果

水産教室が契機となって、成人との交流活動が実現するなどの波及効果があった。

（１）市民、県民等成人との交流活動

平成１０年には水産教室を参観した児童の母親からの依頼を受け、「日立の水産業を学習する会」で講師を務め、‘資源管理型漁業’、‘久慈浜産魚の流通’等について話題提供し、久慈浜産食材を囲んで交流した（表５）。また、これが縁で同年、日立市で開催された「豊かなふるさとづくり全国フォーラム」前夜祭へ招かれ、全国からの参加者に久慈浜産の新鮮な魚介類を提供し、地元水産物をＰＲし、交流した（表６）。

さらに、平成１１年には食生活研究会会長の浅井氏がこの年の交流大会（同氏は審査員を務めた）での久慈浜の発表に関心を持ったことから久慈浜を訪れ、私達は水産業を巡る意見交換等を行った（表７）。また、同年、大みか小校長からの要請を受け、茨城大学地理学研究会ＯＢ会（校長も所属）を対象に「漁業が支える地域の食文化」をテーマとしてゼミを開催した（表８）。

（２）その他の交流活動

県の依頼により県主催の少年水産教室の水産セミナーの講師を務めた（表９）。

（３）マスメディアによる報道

水産教室は新聞やテレビ等に度々取り上げられ、地域の教育に貢献する漁業者のユニークな活動として広く紹介された。これは私達が水産教室等の活動を実践していく上での大きな励みにもなった。

７．今後の課題

漁業に携わる者自らが実践する水産教室の意義は、漁業を職業として「良かったこと」などをありのままに伝えること、「漁業は人が生きていく上で必要不可欠な産業」であることを認識していただくことにあると思う。また、山から海につながる流れの中で、人間を含めた食物連鎖を通じて、環境保全の大切さを理解していただきたいとも思う。と同時に２１世紀に向けて、この水産教室から新しい担い手が誕生してくることを祈っている。

「魚を空気のような存在」であり続けさせないための存在感のある水産業に一歩でも近づくための活動は種々あると思うが、私達は当面、小学校での水産教室や市民との交流等水産業に関する啓蒙活動が主軸と考えており、これらの発展的継続に努めるとともに、この活動を私達自身の成長の糧にもしていきたい。

表１　平成９年の水産教室

開催月日	開催校	参加者	漁業者	主　な　内　容
７／８	大みか小	児童６２名 教師　３名	３名	○モールス信号打電実演、体験 ○知っている魚種とそれを漁獲する漁業 ○茨城県と日立市水産業の特徴 ○漁場の条件（海流、潮目） ○遠洋漁船の航行の仕方（海図、六分儀） ○漁業に従事する人の構成、役割 ○マグロ延縄漁具 ○まき網漁業の漁獲の仕組み ○漁労作業の昔と今 ○資源管理型漁業 ○つくり育てる漁業 ○魚が消費者に届くまで ※感想文提出

　できるだけ児童に考えてもらい、見てもらい、触れてもらうとともに、寸劇形式を取り入れて参加体験してもらう形で２時限連続の授業を進行した。
　これ以降の水産教室でも参加体験型で進めることを心掛けた。

表２　平成１０年の水産教室

開催月日	開催校	参加者	漁業者	主　な　内　容
６／２３	金沢小	児童 110 名 教師　４名	５名	いずれの学校も２時限連続で授業。 　前年の内容に以下のメニューを追加。 ◎海で遊ぶときのルール ◎カツオ一本釣り模擬体験 ◎寸劇形式で競りの再現 　児童全員にヒラメの切り絵を作っておいてもらい、それを活用して資源管理型漁業を説明するとともに競りにかけた。 ◎寸劇形式で山、川、海の関係 　以上、久慈小を除く３校の内容。 久慈小の場合は３校で行った内容の内、事前学習分を省き、以下の内容を加えた。 ◎網の修理実演、体験 ◎‘三代芳松’の生涯について紹介 ※すべての学校が感想文提出
６／２５	久慈小	児童９５名 教師　３名	２名	
７／６	塙山小	児童８９名 父兄　２名 教師　３名	４名	
10／16	大みか小	児童６２名 教師　２名	１２名	
合　計		児童 356 名 ほか１４名	２３名	

表３　平成１１年の水産教室

開催月日	開催校	参加者	漁業者	主　な　内　容
７／５	大みか小 金沢小	児童６１名 教師　３名 児童９０名 教師　３名	１２名 １８名	坂本小を除く５校は２時限連続授業。 ◎は新メニュー ◎ 船びき網漁業の操業実演、入網体験 ○カツオ一本釣り模擬体験 ○モールス信号打電実演、体験 ○遠洋、沖合、沿岸漁業で獲れる魚種 ○漁船で働く人の役割 ○底びき網、船びき網など代表的漁業 ○漁業者の一日の生活 ○魚が獲れる条件 ○日本、茨城県、日立市の漁獲量など ○魚の流通 ○資源管理型漁業 ○競りの体験 ○ＴＡＣ制度 ○漁業者による海をきれいにする取組み ○つくり育てる漁業 ○山、川、海の関係 ○児童からの質問と回答 ○海で遊ぶときのルール ○児童の感想 ※すべての学校が感想文提出。
７／６	久慈小 塙山小	児童９０名 教師　３名 児童６２名 教師　３名	１２名 １８名	
７／７	大沼小 坂本小	児童 105 名 教師　４名 児童 120 名 教師　４名	１２名 １８名	
合　　計		児童 528 名 教師２０名	９０名	

表４　久慈小第５学年の校外学習受け入れ

開催年月日	参加者	漁業者等	内　　容
平成１１年 ６月３日	児童９９名 教師　３名	１９名	校外学習のねらいは水産業という地場産業への関心を高めるとともに、獲る漁業から育てる漁業へ変化しつつある背景をとらえながら、環境問題や食糧問題への関心を持たせること。 ○魚、漁師、漁船、漁港、漁場、漁協の６つのテーマ別に班に分かれ、各班担当の漁業者と質疑応答。 ○市場見学

表５　日立の水産業を学習する会

開催年月日	参　加　者	漁業者	内　　容
平成１０年 １１月４日	塙山学区の住民 塙山小学校校長 全漁連職員 など３１名	９名	久慈浜の旬の魚、資源管理型漁業、久慈浜産魚の流通について話題提供。 アンコウ、カツオ、ミズダコなど久慈浜産の食材を囲んで、質疑応答、交流。

表６　豊かなふるさとづくり全国フォーラム前夜祭

開催年月日	参　加　者	漁業者	内　　容
平成１０年 11 月 25 日	塙山学区の住民 ほか全国から 約１００名	１１名	アンコウの吊し切りを実演し、どぶ汁にしたほかミズダコ等久慈浜産食材を参加者に提供。地元産魚をＰＲし、参加者と交流。

表７　食生活研究会会長浅井まり子氏を囲んでの水産業を巡る懇談会

開催年月日	漁業者等	内　　容
平成１１年 ８月３０日	久慈町漁協 組合長ほか １２名	○浅井氏の食に関する考え方や実践に関する話題提供。 ○水産資源の動向、水産物流通、輸入水産物などに関して質疑応答、意見交換。

表８　茨城大学地理学研究会ＯＢ会を対象にした
「漁業が支える地域の食文化」に関するゼミ

開催年月日	参　加　者	漁業者	内　　容
平成１１年 １１月６日	同大元教養学部長 県内小中高の校長 など９名	８名	○市場見学 ○小学校の水産教室や日立おさかなセンター設立に関わる研究活動について話題提供し、質疑応答、意見交換。

表９　茨城県主催少年水産教室水産セミナー参画

開催年月日	参　加　者	漁業者	内　　容
平成１０年 ７月２９日	県内沿海市町の小学校 第５、６学年　１１１名	１名	日立市内小学校における水産教室の内容と概ね同様。
平成１１年 ７月３０日	県内沿海市町の小学校 第５、６学年　　９１名	２名	

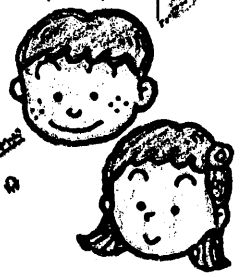
児童から寄せれた感想文

久じ浜の漁師さんへ

大沼小 五年三組 川崎聡也

七月七日(七夕の日)には、お世話になりました。

ぼくは、正直いって漁師に全っく興味がなかったし、漁師なんてかんたんだと思っていました。しかし、漁師の体験をしてみて、漁師って大変だな、と思いました。それに、漁師に少し興味があるようになりました。それに、かつおの一本づりも楽しかったです。お仕事のあいまをぬってぼくたちにいろんなことを教えて下さってありがとうございました。



水産教室の新聞掲載記事（平成11年7月18日）

(5) 茨城新聞 1999年(平成11年) 7月18日 日曜日

海の仕事に輝く目

eye

先生は漁師

モールス実演や疑似・一本釣り

水を入れたペットボトルを釣り上げ、カツオの一本釣りの疑似体験。「重い！　海の中ってこんなんだ」

さまざまな漁具の模型に触れる子どもたち。「海で使ったヒンヤリ感、このボートに乗ってみたい」と笑う。

「セッポ、自分の名前を打ってみよう」。モールス信号を打たせてもらえると聞き、たちまち興味津々の列ができた

記念写真。トラックの荷台を見せて「子供の魚を捕まえた」と教えられたら、魚の気持ちになっちゃった。

「山の腐葉土の栄養分が、雨水によって海に運ばれ、海の生き物を育てる。だから、山に木がないと海の魚が育たないんだ」